

古代の玉作りに挑戦!

古代、出雲は全国でも有数の玉産地で、島根県内には史跡出雲玉作跡をはじめ、数多くの玉作遺跡があります。そのうちいくつかについては、近年発掘調査が行われ、古代の玉作りの技術が明らかになってきました。これまでの成果をもとに、古代の玉作りに挑戦してみました。

割る (1時間経過)



まず碧玉の原石を、ほどよい大きさに粗く割っていきます。ハンマーとして、硬めの河原石を使います。あと一步のところまで石を砕きすぎてしまうという失敗がけっこう多く、遺跡からもこの段階の失敗作がよく出ます。

およその形ができたなら、今度は棒を石の端に押しつけて細かくはぎ取り、形を整えます。実験では棒の代わりに、小さな金槌で形を整えました。弥生時代には、管玉を作るときに石鑿と呼ばれる道具ですって細い溝を掘り、そこを折り取って棒状の素材を作る方法もありました。

ここまでの段階で、約1時間かかりました。



石鑿と溝のついた素材 (松江市・布田遺跡出土：弥生時代)

粗割りに使ったハンマー (松江市・大角山遺跡出土：5世紀)

磨く (3時間経過)



粗く形を整えた石の表面を、磨いてきれいにしながら勾玉の形に近づけていきます。最初は目の粗い砥石、仕上げは目の細かい砥石を使います。実験では最初に人工の金剛砥石、仕上げは包丁用のキメの細かい砥石を使いました。

古代の玉作遺跡からも、いろいろな砥石が出てきます。勾玉の場合、背の部分を磨くには筋砥石と呼ばれる何本もの太めの筋がはいった砥石を使い、腹側は内磨き砥石と呼ばれる棒状の砥石を使っていました。実際、現在の平たい砥石で勾玉を丸く仕上げようとすると、かなり苦労します。

磨かれる石(石材)が硬いと、現代の砥石を使ってもなかなか作業ははかどりません。結局この工程で2時間かかりました。玉作遺跡から出土する砥石には、研ぐのに適した石をわざわざ徳島県や和歌山県あたりから持ってきたものもあります。



勾玉の背中を磨く筋砥石(左)と他地域から運ばれてきた内磨き砥石(左：玉湯町・出雲玉作跡出土 右：安来市・大原遺跡出土)

穴をあける (9時間経過)



おおよその形ができたところで、キリで穴をあけます。キリは市販の四ツ目ギリを使いました。なかなか穴があかず、開始してから6時間後、ようやく穴が貫通しました。

鉄のキリが使われるようになったのは弥生時代の終りごろで、それ以前の玉作では、石のキリで穴をあけていました。鉄のキリでこれだけかかったのに、石のキリだとどれだけ時間がかかったのでしょうか……。



鉄製キリ・タガネ (松江市・平所遺跡出土：弥生時代)

完成!



最後に光沢を出すために桐の木で仕上げの磨きをして、ようやく完成です。結局丸1日かかってしまいました。

古代の玉作りは専業ではなく、農閑期を利用して集中的に作っていたようです。しんしんと雪が降り積もる中を、竪穴住居の中で根気よくせせと玉を磨く。そんな古代の玉作りの姿をつい想像してしまいます。資源に恵まれていたとはいえ、玉作は粘り強い出雲人ならではの仕事であったのかもしれない。

拝見! 古代の玉作工房



玉作公園内で発掘された遺跡や遺物をもとに推定復元された古代の玉作工房の模型が、玉湯町の出雲玉作資料館にあります。建物は竪穴式で広さ約二四平方メートルのワンルーム。中には玉の形作りをする人、磨く人、穴をあける人が見えます。工房はふつうの竪穴住居と同じ構造で、日常生活を営みながら玉作りをしていたものと思われれます。

玉博士に聞く

出雲玉作資料館副館長 勝部 衛さん



「玉の魅力ですか? そうです。ね、私の場合は玉の作り方、とくに穴のあけ方にずっと興味を持ち続けていますね。」
今までに数多くの玉を自分で実際に作ってきましたが、昔の玉のなかには、今同じものを作ろうとしてもどうしてもできないものがある。いったい古代人はどうやって、この石にこんな穴をあけていたのだろう? そんなことを考えていると、時間が経つのも忘れてしまいますね。」

今に息づく玉作り

現在でも玉湯町内では、メノウなどをもちいた玉作りが続いている人びとがいます。少し前には、かなりの「メノウ細工職人」がいましたが、その伝統を受け継ぐ人も現在では五人になってしまいました。作り方は基本的に古代の玉作の工程と同じですが、かなりの部分は機械化され、穴あけは五分ほどでできるようになりました。それでも、一人一日五個くらいが限界だそうです。



玉博士推薦の玉はこれだ! 碧玉製勾玉 (出雲玉作跡出土：弥生時代) やや変わった形をした、製作途中の勾玉。碧玉製の勾玉としては全国最古の玉。



超音波を使い、磨き砂を噴出して穴をあける

桐の木を回転させて、つやを出す